

第2章 国見町の概要

1 位置と自然環境

(1) 位置

本町は、福島県の中通り地方の北端に位置し、町域は東西9.5km、南北7.4kmで、面積は37.95km²となっている。北は宮城県白石市、東は阿武隈川を挟んで伊達市、南は桑折町と隣接する。県都福島市までは約16.5kmの距離にあり、仙台市、山形市、郡山市にはそれぞれ60km圏内である。町内に残る「大木戸」の地名が示すように、白河関と並び、陸奥国を貫く東山道（奥大道）の関門の地として重要な役割を果たしてきた。現在も東北新幹線、JR東北本線、東北自動車道、国道4号などが縦走り、交通の要衝となっている。

(2) 地勢

本町は、奥羽山脈と阿武隈山地に挟まれ阿武隈川水系により形成された福島盆地（信達盆地）の北縁部に位置し、白河から福島にかけて盆地が連なる中通り地方の北端を形成している。

町の北部には標高600～700mの山塊が連なり、南には阿武隈川が流れる。その間には、山麓付近の丘陵地形、標高60～70mの台地状の平坦面、阿武隈川沿いの下位段丘には自然堤防による微高地の多様な地形が広がる。それらの地形を縦貫するように、阿武隈川に向かって小河川が流れ、流路には小さな谷の地形や河岸段丘が形成されている。

阿津賀志山から町北東部の貝田地区周辺にかけては、山々が東西両側から迫り、広々とした平野部から僅かな平地地形へと転換する。

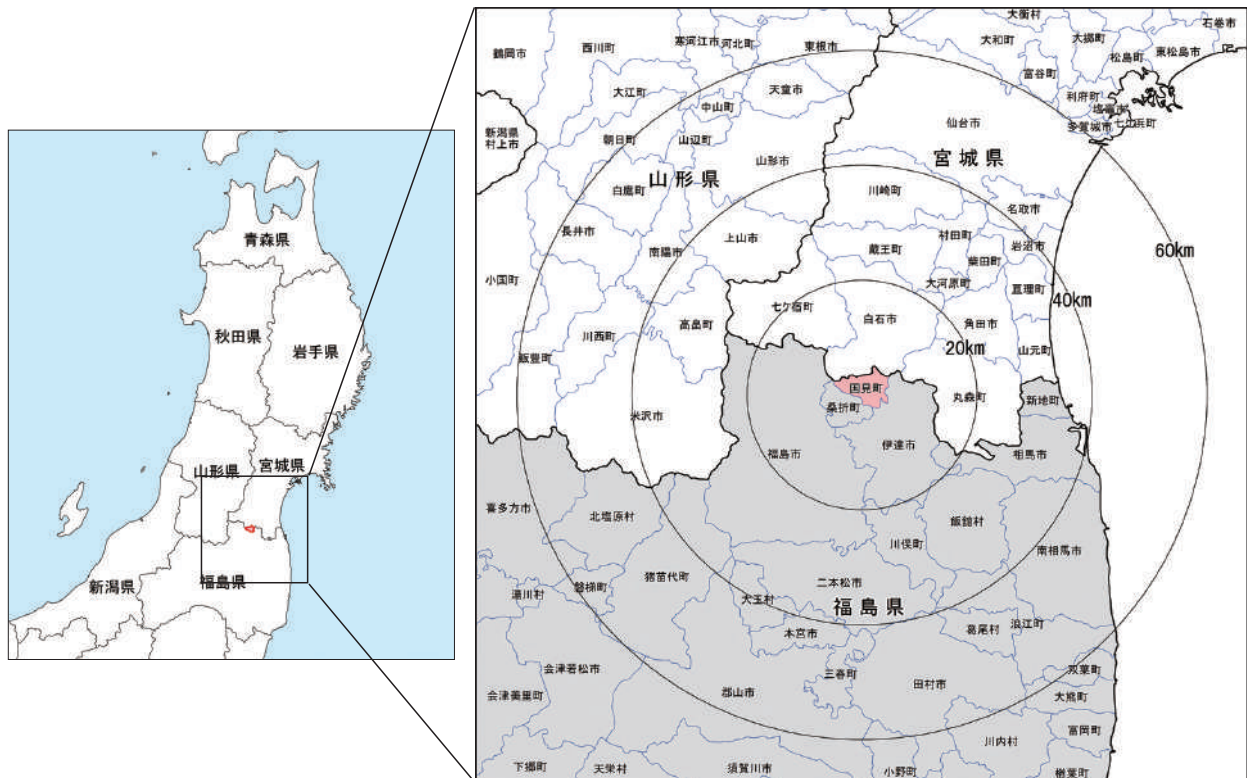


図 2-1 国見町の位置

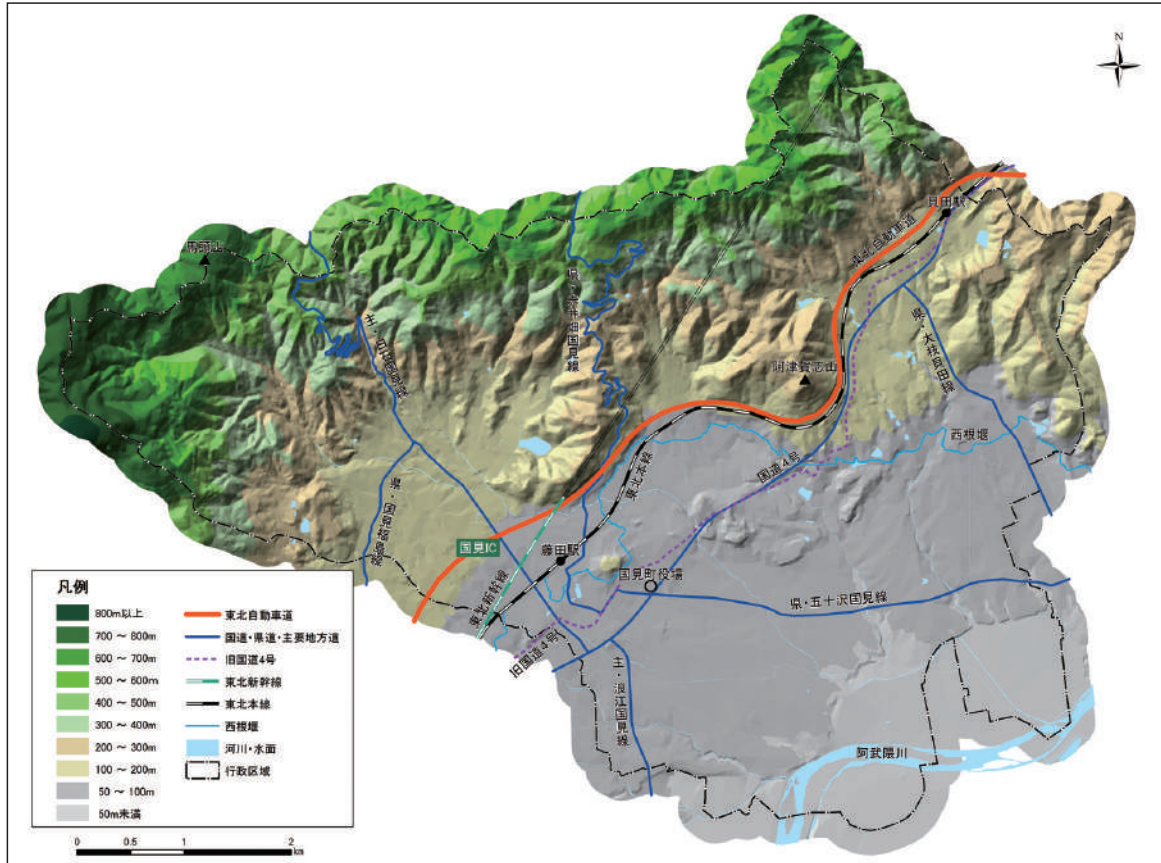


図 2-2 国見町地勢図

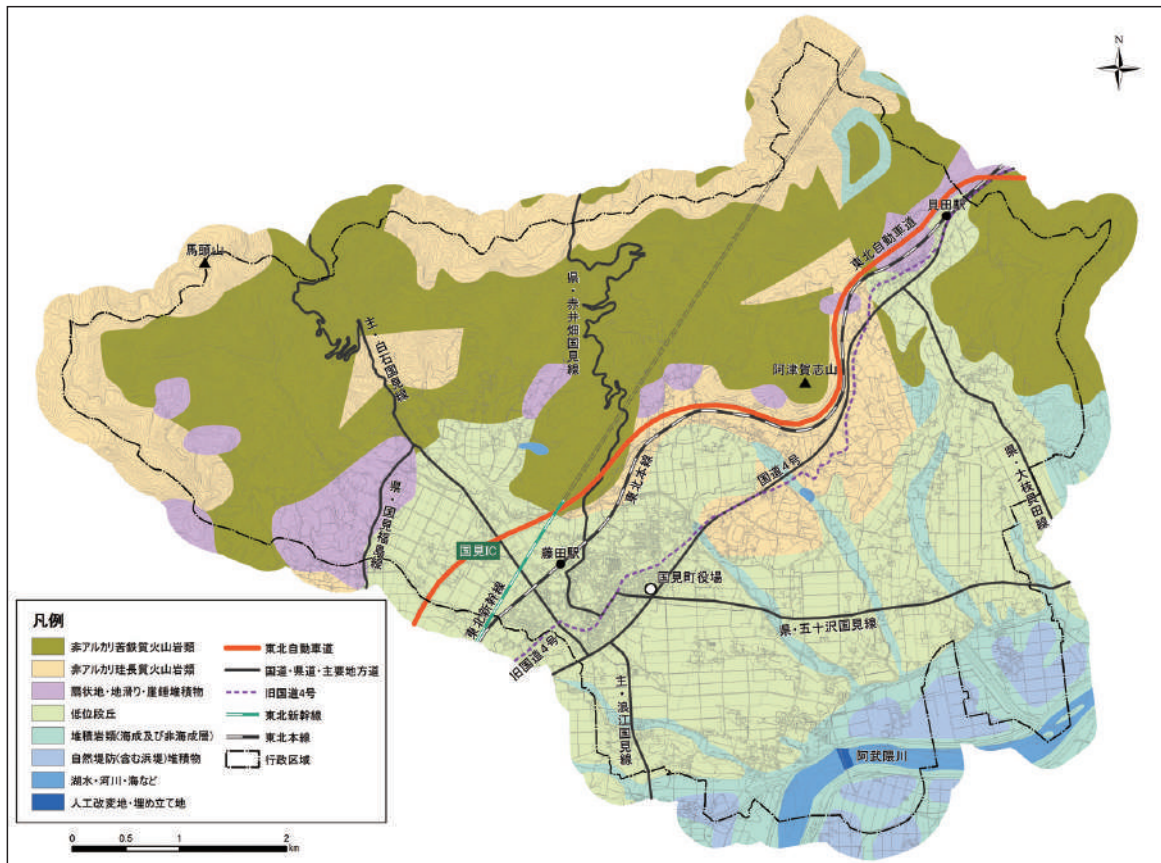


図 2-3 国見町地質図

本町内に位置する。

上記の自然水系のほか、町内には福島市北部から桑折町・国見町を経て伊達市に至る農業用水路の西根堰が流れる。江戸時代初期に掘削されたもので、現在も維持管理が行われ本町の農業を支えている。

(5) 気候

東西に広い福島県は、会津地方、中通り地方、浜通り地方に区分され、気候も異なる。会津地方は寒さが厳しく豪雪地帯となるが、浜通り地方は冬でも雪はあまり降らず比較的暖かい。中通り地方は南北に長いため、地域により寒暖差があり阿武隈川の西に位置する地区は雪が降りやすい。

本町は中通り地方の最北端に位置し、内陸性気候の特徴が混じった太平洋側気候である。年間平均気温は13.4℃で、7月から8月の夏期は、最高気温37℃前後まで上がり、湿

表 2-1 年間平均気温 (単位:℃)

年間積算雨量 (単位:mm)

【出典:国見町気象観測システム】

年	平均気温	積算雨量
平成 26 (2014) 年	12.7	1275.5
平成 27 (2015) 年	13.7	865.0
平成 28 (2016) 年	13.8	853.5
平成 29 (2017) 年	13.0	853.5
平成 30 (2018) 年	13.9	657.0
平均	13.4	900.9

月	平均気温	平均最高気温	平均最低気温
1月	1.7	11.9	-6.1
2月	2.3	15.3	-5.8
3月	6.3	21.9	-3.8
4月	12.3	27.9	0.4
5月	18.3	32.4	6.3
6月	20.9	33.2	11.5
7月	25.4	37.1	17.3
8月	24.9	37.5	15.9
9月	20.8	32.8	11.4
10月	15.2	28.2	4.6
11月	9.2	21.7	-1.7
12月	4.0	16.0	-4.7

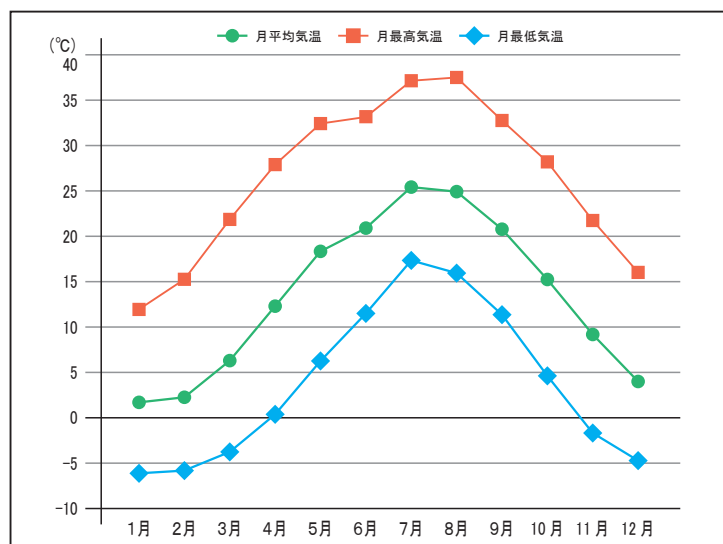


表 2-2・図 2-5 月別平均気温・平均最高気温・平均最低気温 (単位:℃) 【出典:国見町気象観測システム】

月	平均最大雨量	平均積算雨量
1月	18.8	41.0
2月	13.5	25.2
3月	17.8	67.8
4月	26.5	72.6
5月	21.4	50.0
6月	36.0	85.2
7月	33.4	92.3
8月	48.9	171.8
9月	36.4	133.3
10月	33.1	89.4
11月	16.3	42.1
12月	15.6	44.7

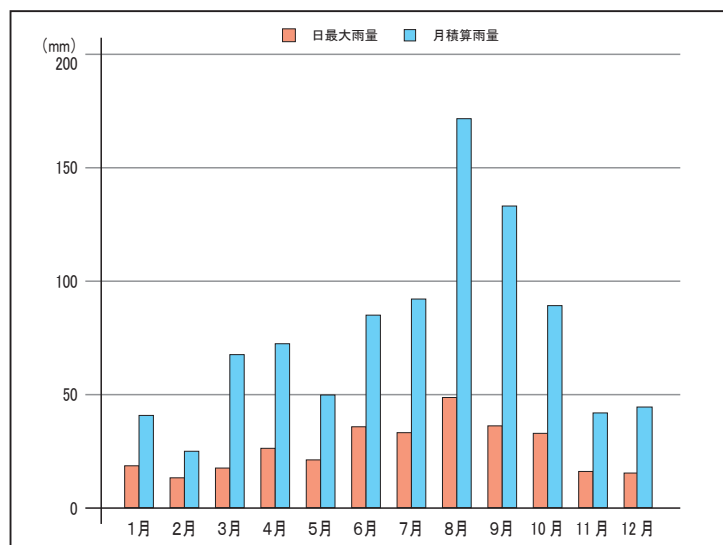


表 2-3・図 2-6 月別平均降水量・平均積算雨量 (単位:mm) 【出典:国見町気象観測システム】

※統計期間は平成 26 (2014) 年~平成 30 (2018) 年とする。

度も高く盆地特有の蒸し暑さが続く。一方で、12月から2月には氷点下6℃前後まで気温が下がり、降雪も中通り南部と比べると多いほうである。年間降雨量は900mm程度で少ない。

(6) 植物

福島県の森林区は大きく、①海岸平野の浜通り低地、②阿武隈山地、③阿武隈川流域の中通り低地、④奥羽山脈（奥羽中央分水山地）、⑤会津盆地、⑥会津山地の6つに分けられ、本町は③及び④の低地帯～山地帯（標高約600～700m）に属する。

本町の大半が属する中通り低地は、本来、土壌が排水の良い砂礫質で、気候が降水量の少ない内陸性気候であるため、乾燥した貧栄養土で占められており、アカマツ林が発達した。アカマツ林は阿武隈川流域の沖積平野の代表的な自然林と考えられるが、現在、その占有面積は少なく、農耕地（特に果樹園）に利用されている。また、奥羽山脈の山地帯では、気候的な極相として日本海側のチシマザサ型のブナ林、地形的な極相としてヒノキ等の針葉樹林が発達した。現在は山地帯まで人為的な活動による影響を受け、ブナ林の伐採が進んだ跡地は雑木林や植林地となっており、スギ・アカマツ（国見町の木）・カラマツなどが発達している。

名木には、樹齢が500年を超えるとされる深山神社の大榎^{かや}大藤があり、町の天然記念物に指定されている。榎・藤は、この地方では山野に自生したり、観賞用に庭樹として植栽されているが、榎の老木群生地は少なくなってきた。また、「福島県緑の文化財」として、「お寺のイチョウ」（石母田龍雲寺）「観月台の大スギ」「国見神社の森」「深山神社の大カヤ」「深山神社の大フジ」の名称で5件が登録されている。

(7) 動物

山間部の自然性が比較的高い地域では、ニホンカモシカ（国特別天然記念物）、ツキノワグマなどの大型ほ乳類やニホンザルなどが生息し、モリアオガエルなどの両生類も確認されている。

田畑や雑木林、人工林などが立地環境に応じて混在する里地・里山の地域から都市部、河川・湖沼にかけては、冬季に飛来するカモ・ハクチョウ類などの渡り鳥が特徴的な鳥類であるほか、ウグイス（国見町の鳥）・カワセミ・カッコウ・コサギなどが生息している。

町内には、鳥獣保護区「阿津賀志山」（56ha）が設定され、身近な鳥獣の生息域を守る取り組みがなされている一方、ツキノワグマ・ニホンザル・イノシシ等の野生鳥獣による食害などの被害も深刻となっており、多様な生態系を維持するための取り組みも行われている。

2 社会環境

(1) 人口・世帯数

本町の人口は平成27（2015）年10月1日時点で9,512人となっている。昭和60（1985）年以後人口は減少を続け、30年間で2,498人が減少するとともに、1万人を下回ることとなった。世帯数は同じ期間で418世帯増加しており、1世帯あたり平均で4.2人から2.9人に減少し、核家族化の傾向が顕著となっている。年齢階層別人口では、15歳未満の年少人口は平成27（2015）年で10.0%、昭和60（1985）年と比較すると約半分となり、年齢65歳以上の老年人口は倍増しており、少子高齢化が深刻な問題となっている。

また、平成27（2015）年に策定した『国見町人口ビジョン』によると、毎年約120人程度減少し、令和22（2040）年には約6,300人になると予測されている。このような人口の減少と急速な少子高齢

化は、福祉や医療のみならず、生活文化の継承にも深刻な影響を及ぼすものと想定される。

表 2-4 地区別地域・人口及び世帯（単位：人・世帯）

【出典：国勢調査】

年次	世帯数	人口総数	小坂		藤田		森江野		大木戸		西大枝	
			世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口
昭和 55 年	2,803	12,050	434	1,840	1,291	5,183	513	2,419	373	1,745	192	863
昭和 60 年	2,873	12,010	443	1,855	1,364	5,294	506	2,336	369	1,657	191	868
平成 2 年	2,944	11,888	449	1,822	1,416	5,190	520	2,409	367	1,614	192	853
平成 7 年	3,103	11,736	479	1,817	1,566	5,439	514	2,190	359	1,491	185	799
平成 12 年	3,141	11,198	487	1,789	1,620	5,317	501	1,999	353	1,362	180	731
平成 17 年	3,212	10,692	569	1,903	1,606	4,910	508	1,891	351	1,302	178	686
平成 22 年	3,204	10,086	622	1,933	1,670	4,911	396	1,420	336	1,181	180	641
平成 27 年	3,291	9,512	616	1,902	1,695	4,606	475	1,369	332	1,067	173	568

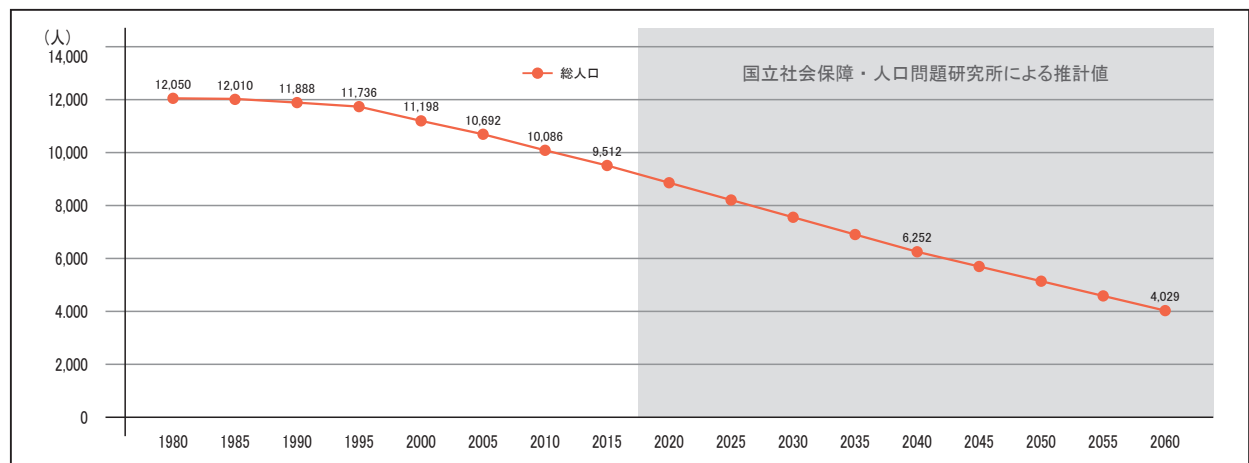


図 2-7 国見町の総人口の推移（単位：人）

【出典：国見町人口ビジョン】

年次	0~14 歳		15~64 歳		65 歳以上	
	人口	構成比	人口	構成比	人口	構成比
昭和 55 年	2,642	21.9	7,834	65.0	1,574	13.1
昭和 60 年	2,531	21.1	7,724	64.3	1,755	14.6
平成 2 年	2,167	18.2	7,656	64.4	2,065	17.4
平成 7 年	1,795	15.3	7,497	63.9	2,444	20.8
平成 12 年	1,534	13.7	6,978	62.3	2,686	24.0
平成 17 年	1,344	12.6	6,451	61.2	2,807	26.3
平成 22 年	1,181	11.7	5,853	58.0	3,052	30.3
平成 27 年	953	10.0	5,117	53.9	3,425	36.1

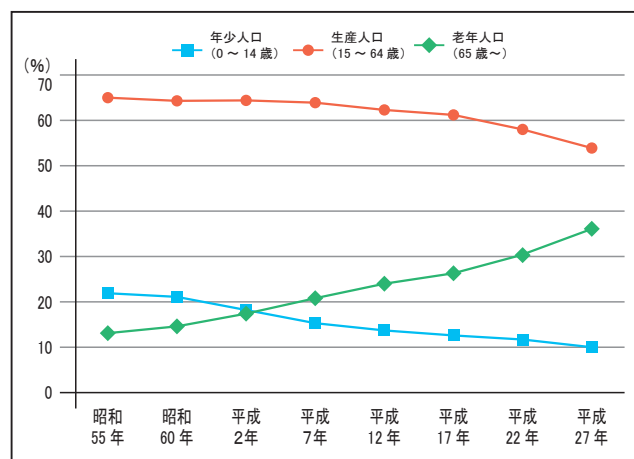


表 2-5・図 2-8 年齢別人口の推移（単位：人・%）

【出典：国勢調査】

(2) 交通

本町は、古代から陸上交通の要衝となってきた。現在も東北新幹線、JR 東北本線、東北自動車道、国道 4 号が折り重なるように南北に縦断し、宮城県七ヶ宿町へ抜ける主要地方道白石国見線が東西に横断している。



図 2-9 国見町の主な交通網

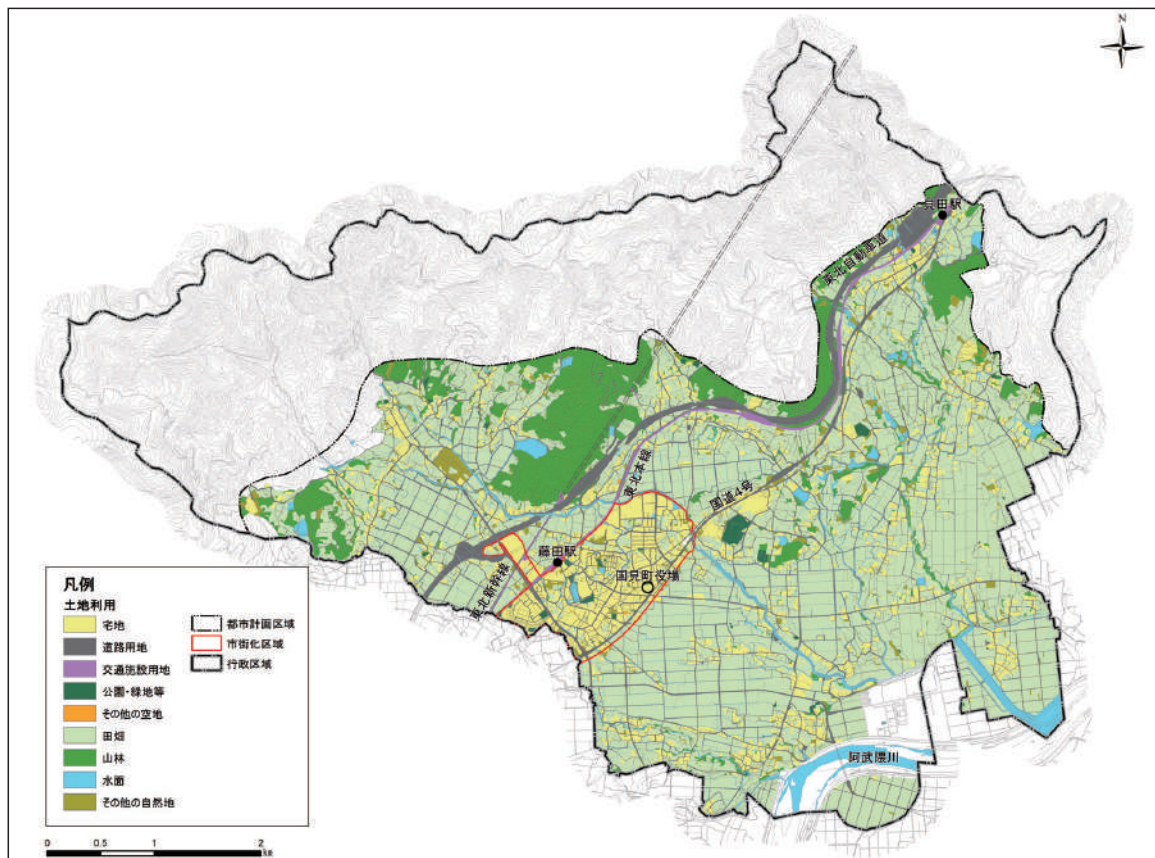


図 2-10 土地利用状況 【出典：都市計画基礎調査より】

国道は南北に国道4号が通り、福島市・白石市まではそれぞれ約16.5km、車で30分程度である。また、東北自動車道には国見インターチェンジと国見サービスエリアが整備されており、これは本町の位置が福島市と白石市及び郡山市と仙台市のほぼ中間に位置するためである。郡山市・仙台市まではそれぞれ約60km、東北自動車道経由で1時間程度である。県道は、主要地方道白石国見線、主要地方道浪江国見線、五十沢国見線、赤井畑国見線、大枝貝田線がある。

鉄道は、JR東北本線が南北に通り、藤田駅・貝田駅が存在する。藤田駅から福島駅までは約18分、郡山駅・仙台駅まではそれぞれ約1時間となっており、通勤・通学の重要な駅となっている。貝田駅は無人駅であるが、大木戸地区など周辺の人々が利用している。

(3) 土地利用

本町全域の7割が県北都市計画区域に指定されており、区域区分に基づいた土地利用の誘導が行われている。宅地は全体の7%程度で、市街化区域内に集中して分布しており、市街化区域以外では、山林や田畑など、自然豊かな土地利用が大部分を占めている。

(4) 産業

① 産業構造

総人口の減少に伴い、産業構造別就業者数の総数も減少傾向にある。昭和60(1985)年以後、平成2(1990)年の6,517人をピークに、平成12(2000)年まで6,000人前半を維持していたが、平成27(2015)年は4,784人まで減少している。

第一次産業の就業者数は昭和60(1985)年に1,873人となっていたが、以後減少を続け、平成27(2015)年は796人となって、半数以下にまで落ち込んでいる。

第二次産業の就業者数は昭和60(1985)年以後、平成2(1990)年の2,430人をピークに、平成12(2000)年まで2,000人前半を維持していたが、平成17(2005)年の統計で急激に数を減らし、平成27(2015)年は1,302人まで減少している。

第三次産業の就業者数は昭和60(1985)年に2,311人であったが、平成17(2005)年に2,846人となるまで増加を辿り、以後、平成27(2015)年は2,660人まで減少している。

構成比を見てみると、昭和60(1985)年は各産業が3割前後の構成比となっていたが、上記の就業者数の増減を経て、平成27(2015)年は、第一次産業が16.7%、第二次産業が27.2%、第三次産業が55.6%となっている。第一次、第二次産業の就業者減少が顕著であり、この結果、第三次産業は微増ながらも構成比が50%を超える結果となっている。

表 2-6 産業別就業者数

【出典：国勢調査】

年次	総数		第一次産業		第二次産業		第三次産業		分類不能産業	
	人	構成比(%)	人	構成比(%)	人	構成比(%)	人	構成比(%)	人	構成比(%)
昭和60年	6,365	100.0	1,873	29.4	2,179	34.2	2,311	36.3	2	0.1
平成2年	6,517	100.0	1,565	24.0	2,430	37.3	2,504	38.4	18	0.3
平成7年	6,317	100.0	1,224	19.4	2,385	37.7	2,703	42.8	5	0.1
平成12年	6,011	100.0	1,124	18.7	2,136	35.5	2,747	45.7	4	0.1
平成17年	5,487	100.0	1,060	19.3	1,579	28.8	2,846	51.8	2	0.1
平成22年	4,914	100.0	877	17.9	1,376	28.0	2,621	53.3	40	0.8
平成27年	4,784	100.0	796	16.7	1,302	27.2	2,660	55.6	26	0.5

② 農業

本町の産業は、古くから農業が基幹産業である。主な平地には水田が広がる。ほとんどの農家が米の生産を行っており、現在の主な作付け銘柄はコシヒカリである。県下でも良質な米であるため、種もみとして生産する農家も多い。

また、養蚕業も盛んに行われていた。福島県伊達郡の養蚕業は奈良・平安時代に始まったと伝えられ、室町時代には伊達氏が上洛した際に絹織物を公家達に献上したとの記録が残る。江戸時代になると、養蚕・製糸業が発達し、良質な生糸は京都などへ供給され、西陣織等の原材料となった。その後、蚕種の生産も盛んになり、安永3（1774）年には幕府より「奥州蚕種本場^{おうしゅうさんたねほんば}」の称号が伊達郡内の村々に与えられ、本町では徳江・川内がその称号を得た。養蚕業は伊達郡の代表的な産業となり明治・大正期も発展してきた。しかし、蚕の飼育の難しさに加え、生糸価格の乱高下、化学繊維の開発等による値段の下落等、常に大きなリスクが伴う養蚕業から、新たな生業への転換を求めようになった。



写真 2-1 半澤果樹園のサクランボ

そのような中で、明治後半から昭和初期にかけて、現在に続く果樹生産地への転換が図られていく。

大木戸の半澤果樹園は、明治 20（1887）年代終わりから開墾して十数 ha もの広さを持つ大規模な果

【国見町の特産品】	
	<p>米 本町は昔から米作りが盛んで、阿武隈川流域の肥沃な粘質土壌から、8世紀頃には東北有数の条里制による水田が整備された。現在でも県下有数の種場（採種ほ場）として、良質な種もみを生産している。作付されている品種は、コシヒカリが多い。秋の収穫時期になると稲穂が垂れた田園風景が一面に広がり、黄金色に輝く。</p>
	<p>桃 盆地特有の寒暖差が大きな気候は、国見特産の桃をおいしく育てる。今人気の「あかつき」は福島の果樹試験場（農業総合センター果樹研究所）で生まれ、とてもジューシーで果肉はやわらかく、香り高い風味を誇る。本町を代表する逸品となっている。</p>
	<p>あんぼ柿 一つ一つ丹念に皮を剥き、独自の技術で乾燥させると甘み豊かな干し柿（あんぼ柿）ができる。本町では大粒の渋柿、蜂屋柿がよく使われ、あめ色の果肉は、ゼリーのような食感で、自然の甘さは、大地と太陽の恵みを感じさせる絶品である。</p>
	<p>サクランボ 厳しい冬を越した果樹は、春一斉に花を咲かせる。そして、果物シーズンの幕開けを告げるのがサクランボである。本町は、山形県東根市より栽培方法を導入以来、サクランボの産地である。主力品種の「佐藤錦」は手間をかけ、雨風をさえぎり、丹念に生産している。大地の恵みと太陽の力をたっぷりと受け、独自の光沢を放ち「紅いルビー」と称される。</p>

樹園を経営し、サクランボを生産した。大正期に最盛期を迎え、東京・大阪の大都市へ出荷された。その後、同果樹園による生産規模は縮小するが、同時期に福島市で始まった桃・リンゴなどの生産も導入され、徐々に果樹栽培への転換が図られていく。

昭和初期にはあんぼ柿の製造が始まった。あんぼ柿はこの地方の菓子類の一つとして作られてきた干し柿で、皮を剥いた渋柿を寒風の中、天日に干し、冬期間の保存食として食べられていた。当地方の養蚕住宅は広く、風通しも良好に造られていたことから、あんぼ柿作りに適していた。昭和初期に、保存・品質性を高める^{いおうくんじょう}硫黄燻蒸あんぼ柿（干し柿）製法が確立し、本町でも盛んに製造されるようになった。硫黄燻蒸をしたあんぼ柿（干し柿）は、これまでの干し柿とは違い、ゼリーのような食感であり、見た目もあめ色が美しく商品価値が高い。ここに全国へ出荷できる産業へと変遷した。

加えて、昭和30（1955）年代後半には、桃を作付けする農家が増加した。本町の地質は、桃栽培に適しており、多くの農家で桃を栽培するようになり、現在では全国9位、県内3位の出荷量を誇る。「あかつき」が主力品種である。

③ 商工業

平成15（2003）年製造業の事業所数は29事業所であったが、平成23（2011）年には19事業所となった。精密機械製造や繊維工業などがあったが、産業の縮小・海外への進出などにより減少した。卸売業も平成3（1991）年は23事業所だったのが、平成24（2012）年には9事業所に減少している。また、町内の商店も平成3（1991）年は167店だったのが、平成24（2012）年には83店にまで減少している。

その主な要因は、店主の高齢化や大型のショッピングモール・スーパーマーケットが近隣市町に出店したことによる来客数の減少によるものである。

④ 観光

本町は豊かな自然に囲まれ、全国でも有数の果物の産地である。春には、町内中心部にある観月台公園の桜が満開となり、また平地、丘陵地を問わず桃をはじめ果樹の花が咲き乱れ、奥羽山脈の緑のコントラストと相まみえ、町内一円は桃源郷となる。本町のシンボルである阿津賀志山頂上からは福島盆地を一望することができ、眼下に広がる田園風景は、春を映す鏡のような水面、夏の緑、秋の黄金色へと日々変化する。9月23日は「くにみの日」として町全体が義経まつり一色となり、源義経ゆかりのこの町は多くの観光客でにぎわう。

表 2-7 商工業事業所数

年次	工業	年次	卸売業	小売業
平成15年	29	平成3年	23	167
平成16年	28	平成6年	15	159
平成17年	26	平成9年	14	148
平成18年	25	平成14年	10	140
平成19年	26	平成19年	10	124
平成20年	25	平成24年	9	83
平成21年	24			
平成22年	23			
平成23年	19			
平成24年	23			
平成25年	20			
平成26年	21			

【出典】
工業：
平成26（2014）年工業統計調査結果報告書
商業：
商業統計調査、経済センサス-活動調査



写真 2-2 観月台の桜



写真 2-3 桃の花



写真 2-4 阿津賀志山頂からの眺望



写真 2-5 義経まつり

3 歴史環境

(1) 歴史背景

① 原始

本町には、旧石器時代の遺跡として、光明寺地区の県境丘陵裾の段丘に所在する滝沢遺跡があり、昭和45（1970）年の道路工事でローム層中から東山型ナイフが出土している。

縄文時代の遺跡は、標高50～100mの台地上に分布し、町内には32遺跡存在する。縄文時代前期は中山遺跡（高城地区）・上野台遺跡（森山地区）で石器・土器・住居跡が確認されている。中期になると遺跡の規模は大きくなり数も増加する。特に岩淵遺跡（高城地区）では、全国的にも最大級の複式炉を持つ竪穴式住居を含む集落跡が確認されている。

弥生時代の遺跡は仏供田遺跡（徳江地区）で集落跡が調査され、堰下遺跡（泉田地区）で蛤刃石斧等が発見されているが、遺跡数も少なく不明確なものが多い。しかし、鉄器文化が徐々に伝わることに伴い、農作業の効率が向上し、現在にまで及ぶ稲作農業の第一歩を踏み出したと推察できる。

② 古代

古墳時代になると農耕生産は更に発展し、階層の分化を促した。町内には塚野目古墳群・森山古墳群など、富を蓄えた豪族達が築いた5～7世紀頃の古墳が、副葬品とともに数多く残っている。また、森山第四号墳の石室石材に凝灰岩が使用されており、当時から石材の採石加工が行われていたことが確認できる。

古代の本地方は、陸奥国信夫郡に属し、伊達郷と呼ばれていた。東北地方でも有数の規模を持つ条里制による開田が平野部で進められ、大木戸窯跡群では、須恵器が焼かれていた。奈良・平安時代になると重弁蓮華文軒丸瓦・じゅうべんれんげもんのきまるがわら・せんかいかもんのきまるがわら旋回花文軒丸瓦・れんげもんのきまるがわら蓮華文軒丸瓦を出土する徳江廃寺が創建され、平安時代には山居遺跡（高城地区）で製鉄が行われていた。

10世紀になると伊達郷ほか2郷は信夫郡から分離し、伊達郡が設置され、平安時代末には平泉藤原氏の支配下に置かれた。この時期に造営された堰下古墳（泉田地区）の経塚からは、すはまそうちようきよう洲浜双鳥鏡が出土するなど、12世紀後半におけるすぐれた工芸品が伝わっている。

【奥州合戦と阿津賀志山防塁】

文治5（1189）年7月、源頼朝は28万4千騎といわれる軍勢を頼朝率いる「大手軍」、太平洋沿岸を進む「東海道軍」、日本海側から攻め込む「北陸道軍」の3隊に分け、平泉に向けて進撃を開始した。



写真 2-6 岩淵遺跡（町指定史跡）



写真 2-7 蛤刃石斧（堰下遺跡出土）



写真 2-8 円筒・朝顔形埴輪
（塚野目第一号墳出土）



写真 2-9 洲浜双鳥鏡（堰下古墳経塚出土）

大手軍は白河の関を越え、8月7日伊達郡の藤田宿へ着陣した。

藤原秀衡^{ひでひら}亡き後、その跡を継いだ泰衡^{やすひら}は、既に頼朝の弟義経を衣川館にて自刃させており、恭順の態度を示していた。

しかし頼朝の大動員の報に接した泰衡は、鎌倉軍の侵攻を阻止すべく、阿津賀志山に堅固な防塁を築き、迎撃の態勢をとった。この二重の堀が現在も一部残っている阿津賀志山防塁である。『吾妻鏡』には

「阿津賀志山に城壁を築き要害を固む、国見の宿と彼の山との中間に、俄に口五丈の堀を構え、逢隈河^{あぶくまがわ}の流れを堰入れ柵とし、異母兄西木戸太郎国衡を以て大將軍と為す」と記載がある。

と記載がある。

阿津賀志山防塁は、阿津賀志山の中腹からほぼ滑川に沿って、当時の阿武隈川岸に達する約3.2kmにわたって構築されていた。この防塁の構築に動員された人夫は、延べ人数で約25万人と見積もられている。

『吾妻鏡』によれば阿津賀志山の戦いは8月8日から始まり、鎌倉軍は僅か3日間でこれを制した。鎌倉軍の別動隊が大きく迂回して奥州軍の後陣を奇襲したため、奥州軍は混乱をきたし、態勢を立て直せないまま敗北を喫した。

阿津賀志山陣の総大将であった藤原国衡^{くにひら}は和田義盛・畠山重忠らに討ち取られた。その後、泰衡は、夷狄嶋^{えぞがしま}（北海道）に向けて逃亡したが、途中で家臣に殺害され奥州藤原氏は滅亡した。

これにより藤原氏の奥州支配は終わりを告げる。

③ 中世（伊達氏支配の確立へ）

奥州藤原氏の平泉政権滅亡後、頼朝は多くの有力御家人を地頭として任命し、郡庄の行政事務を行わせた。奥州合戦に功のあった藤原朝宗^{ともむね}（常陸入道念西）の一族も、伊達郡を与えられて本領の常陸国から移り、伊達氏と称し地頭として支配を行った。以後、戦国時代まで伊達氏は居城を、現在の桑折町・伊達市梁川町などに移動させながら、支配を固めていくこととなる。

豊かな湧水があった光明寺・森山・泉田・内谷地区などでは、水路やため池などのかんがい施設が整備され生産の基盤が強化されていった。また光明寺地区では、伊達五山の一つとして光明寺が建立されるなど、伊達氏の庇護のもと寺院の整備が行われた。

以後も多少の変動があったものの伊達氏の支配が続いていたが、中世末期となると、天文の乱（1542～1548）など伊達氏内部や領主間の争いが続き、伊達氏は本拠地を伊達郡から米沢へ移すこととなる。

伊達輝宗・政宗の時期になると、相馬氏との抗争が絶えず、宮城県伊具地方がその戦場となった。米沢方面に通じる小坂峠と、奥州街道が所在し、更には伊具方面にも連絡できる本町域は、交通上・軍事上の重要性を増していった。天正17（1589）年、政宗は相馬氏との抗争に勝利し、福島県会津地方の蘆名氏^{あしな}を大敗させ、南奥羽の覇権を確立したが、天正18（1590）年、豊臣政権による「奥羽仕置」が実施され、中世の終焉を迎える。

④ 近世

豊臣秀吉の「奥羽仕置」の結果、伊達郡は新しい領主蒲生氏郷の所領として編入された。その後、慶長3（1598）年に上杉景勝へと領主が移り、検地や街道・宿場の整備が進められる。寛文4（1664）年に幕府直轄領（天領）となり、伊奈半左衛門・国領半兵衛などの代官による支配を受けることになる。



写真 2-10 阿津賀志山防塁（国指定史跡）
阿津賀志山防塁から東を望む。現代においても、土塁と空堀が原型をとどめている。日本三大防塁の一つ。



写真 2-11 西大枝深山神社廻米絵馬
(町指定有形民俗文化財)



写真 2-12 元禄 11 (1698) 年貝田村絵図
(県庁文書 1983「若松城地関係其の他」より)
※福島県歴史資料館寄託



写真 2-13
天保年間 (1830~1844) 藤田村絵図



写真 2-14 小坂村絵図 (江戸時代後期)
(「小坂区有文書」より)
※福島県歴史資料館寄託

その後本町では、本多家（福島藩）・松平家（桑折藩・篠塚藩）・佐渡奉行（幕府領）・仙台藩預・木下家（足守藩）などと領主が変遷し、幕府領として幕末を迎える。

江戸時代の本町域では、2つの街道と阿武隈川の舟運による物流の活況や半田銀山の操業、養蚕業の勃興、西根堰の開削による農業の伸長により発展する。しかし、伊達郡一円支配から領域が村ごとに細分化され、天明年間（1781～1789）の大飢饉などにより農民層の分化が進む。また、寛延2（1749）年の農民一揆や慶応2（1866）年の世直し一揆など幕藩体制を大きく揺るがす大規模な騒動も発生した。

【街道・宿の成立】

江戸時代の幹線道路である奥州街道は、江戸から陸奥三厩^{むつみんまや}（青森県）まで続き、陸奥・松前諸大名の参勤交代の主要街道として、宿場町の整備が行われた。

伊達・信夫両郡には12の宿駅が置かれた。主要宿駅には本陣・脇本陣が設置された。また、名主・組頭・百姓代の村役人のほかに、宿役人として年寄・検断・問屋が置かれた。奥州街道を登るのは松前・八戸南部・盛岡南部・一関田村・仙台伊達の諸大名であり、桑折宿において、七ヶ宿を通る出羽・津軽の大名十三家がこれと合流する。

本町域には、奥州街道貝田宿・藤田宿、羽州街道小坂宿があった。

藤田宿は、大名や公用役人の宿泊は少なく、一般の庶民や公用ではない武士が宿泊する旅籠が並び立ち、商人・農民の憩いの場所でもあった。享和4（1804）年頃には、藤田宿の旅籠・揚屋には多くの飯盛女を抱え、桑折宿や近郷からの者が投宿したと考えられている。明治10（1877）年頃には、旅籠16戸、料理屋11戸があり、大いににぎわい、毎月1の付く日と6の付く日に市が立った（六斎市）。

貝田宿と小坂宿は、ともに峠を隔てて仙台藩領に接する境界の宿場であったことから、小規模な宿場であるものの口留番所が置かれ取り締まりが行われていた。口留番所付近の道は鍵型に折れ曲がり、町尻に寺院が整備されるなどの特徴を持つ。小坂宿では、小坂峠を背後に持つことから、旅人の旅籠や険しい峠道を上るための牛宿などが軒を並べた。同宿は参勤交代の大名達も休息に用いた。

⑤ 近代

明治維新後の本町域は、中村藩民政取締桑折県・南部白石藩の支配となるが、廃藩置県によって福島県の管轄となる。

近代国家が成立する過程にあって、本町域においても目まぐるしいまでの制度変化に、住民は大きな戸惑いを感じていたと考えられる。まず明治4（1871）～9（1876）年頃までに地租の改正が行われた。それぞれの村で実測調査が行われ、さながら明治の総検地といった状況であった。

明治22（1889）年、市制・町村制の施行により小坂村・藤田村・森江野村・大木戸村・大枝村が成立し、これに伴って村議会議員が選出され村議会が誕生した。

一方で、実際の本町域の農村部の生活は、明治20（1887）年代の小作地率が35%超に達していることから、この時点で小作化が相当進んでいたと思われる。その後、大正5（1916）年まで更に小作化が進んでいる。

表 2-8 国見町小作地率表（国見町史より）

年代	自作地	小作地	小作地率
明治 26（1893）年	7,799 反	4,307 反	35.6%
明治 35（1902）年	8,792 反	5,963 反	40.4%
明治 43（1910）年	9,167 反	6,159 反	40.1%
大正 5（1916）年	8,912 反	7,218 反	44.7%

※明治30（1897）年代は開墾が進んだ時期であることを勘案すると、小作地率自体が変わらないように見えるが、実態は小作地自体多くなっており、小作化が進んでいる。

【石蔵の普及】

本町には、「国見石」と呼ばれる凝灰岩が広範囲に分布・露出し、古くから採石を行ってきた。これらは、石工により加工され様々な用途で使用された。

大正から昭和初期に、豪農・豪商による石蔵建築材として使用されたが、戦後、昭和30（1955）～40（1965）年代に採石が盛んに行われ、石蔵が一般にまで普及し町内の全域で建築されるようになった。現在も町内には多種多様な石蔵や石造建築物が多く残る。



写真 2-15 旧小坂村産業組合石蔵
（国登録有形文化財）

【豪商の誕生（奥山家）】

明治期に本町域において豪商が生まれた。藤田の宿場で初代奥山忠左衛門は奥山呉服店を創業、東京から仕入れた呉服類を手広く販売、売り上げを伸ばした。明治4（1871）年1月の藤田村内の売上では第2位の実績を残している。

2代目忠左衛門は呉服店を更に拡張、同時に農地を広く取得し、金融業も始めた。

3代目忠左衛門は、土地の取得を更に拡大、同時に貸家業を始めた。また、奥山合名会社を設立し、金融業を更に拡大、北海道の胆振地方鶴川村の山林を買収する。更に日本鉄道会社奥州線藤田駅（現：JR 藤田駅）と第百七銀行藤田支店の誘致に尽力するなど奥山家は3代目で隆盛を極めた。



写真 2-16 奥山家住宅 主屋・洋館
（国登録有形文化財）

⑥ 現代

農村地域を形成する本町にとって、戦後の農地改革は重要な出来事であった。戦前の地主的土地所有制は解体され、自作農を主体とする農業へと変革されていった。各町村は、戦前の農業会にかわる農業協同組合を設立して、農地改革の成果を維持・発展させていった。更に、農家は戦後日本の経済復興とその成長に対応するために、二・三男の都市部への移住や兼業化を進めることによって、その所得を増大させるとともに、果樹経営や野菜の栽培に力を注いだため、やがて本町は、これまでの米と養蚕に加え、果樹と野菜を供給する近郊農業の町へと変貌を遂げた。

昭和 28 (1953) 年 9 月には、町村合併のモデル地区として県の指定を受け、翌 29 (1954) 年、県下にさきがけて、藤田町・小坂村・森江野村・大木戸村・大枝村の 1 町 4 村が合併し国見町が誕生した。

昭和 30 (1955) 年代の高度成長期には、新国道 4 号が開通し、仙台・福島間の東北本線電化が完了した。農業では、農業基本法が制定され、構造改革事業が進められ、本町では水稻・養蚕・果樹を基幹作物と定めた。

昭和 40 (1965) 年代に入ると、小坂峠自動車道が開通し、藤田総合病院が完成した。昭和 50 (1975) 年代には東北自動車道・東北新幹線の開通を迎え、更に、国見インターチェンジの開設により、首都圏との時間的距離が著しく短縮され、経済交流の活発化、特に農産物などの流通拡大が期待された。

(2) 国見町に関わる主な人物

① 大野東人 (奈良時代 ?~742 年頃) 貴族

奈良時代の貴族。壬申の乱で活躍した果安の子、和銅 7 (714) 年、迎新羅使として初めて記録に登場する。神亀元 (724) 年、陸奥国に多賀城を築く。国見町鹿島神社の縁起によると、「奈良のころ陸奥の国の蝦夷征伐のため東征を行い、守護神として常陸鹿島明神を勧請し藤田宿に来る。当時阿津賀志山周辺の蝦夷人に対し藤田源宗山にて館や柵を築き蝦夷攻略の本拠とした」とある。

天平 12 (740) 年に都へ戻り、翌年平城京留守役に任命されるが、天平 14 (742) 年に没する。

② 藤原泰衡 (1155 若しくは 1165~1189 年) 武将

奥州藤原氏、3 代秀衡の子。異母兄に国衡。

源頼朝からの要請に屈し、平泉に逃れていた義経を自害へと追い込む。その後、頼朝が奥州合戦の兵を起こすと、阿津賀志山から阿武隈川に至る全長約 3.2km の防塁を築き頼朝軍を迎え撃ったが、3 日間の戦闘で陥落した。泰衡は国分原鞭楯の本陣 (現：仙台市) を退き、以後散発的な戦闘を行うが、平泉を放棄し、現在の秋田県大館市付近まで敗走の後、家臣の裏切りに遭い殺害される。

③ 伊達朝宗 (鎌倉時代 ?~1199 年) 武将

『吾妻鏡』によれば、文治 5 (1189) 年の奥州合戦に際して石那坂の戦い (福島市) で息子の為宗・為重・資綱・為家とともに奥州藤原氏の配下佐藤庄司を討ち取り、武功を立てた。

これにより、源頼朝より伊達郡を賜る。朝宗は、これまでの



写真 2-17 藤原泰衡
(源義経公東下り絵巻「平泉入り」より)
※中尊寺所蔵



写真 2-18 伊達朝宗像
※仙台市博物館所蔵

伊佐、あるいは中村の姓を改め、以後伊達を称することになった。これが伊達氏の始まりとなる。

④ 松尾芭蕉（1644～1694年）俳人

元禄2（1689）年3月に弟子の曾良を伴い、『おくのほそ道』の旅に出る。同年6月7日に白河の関より福島域に入り、本町には同月17日から19日頃に到着。

同じ東北でも直轄地や譜代大名の領地であった福島域から宮城域（外様大名仙台伊達藩）へ入ることは、本格的な「みちのく入り」の感を持ったことだろう。

『おくのほそ道』には、

「^{きりよへんど}驛旅辺土の行脚、^{しゃしんむじょう}捨身無常の観念、道路にしなん、
是天の命なりと、^{いささか}気力聊とり直し、^{みち}路縦横に踏で伊
達の大木戸をこす」

と記されている。

⑤ 奥山忠左衛門（3代目忠左衛門）（1859～1929年）

豪商・政治家

旧梁川村（現：伊達市）にて生まれる。明治10（1877）年に2代目奥山忠左衛門の養子となり一人娘イシと結婚する。奥山家は代々呉服屋や貸地業を営んでいたが、3代目より貸家業、金融業など事業を拡大、県下有数の豪商となる。

大正10（1921）年には、旧藤田宿の中心にある自宅敷地に純和風の主屋と荘厳な洋館を建築した。

その間、県会議員や藤田町長などを歴任、藤田駅の誘致や銀行の建設に奔走し、本町の近代化・発展に尽くした。

⑥ 菅野喜三郎（1873～1958年）政治家

旧小坂村内谷の床屋の末子で、内谷村の村長を務めた父末吉と五十沢村の旧家から嫁いできた母トラの長男として明治6（1873）年8月22日に生まれた。

日清、日露戦争ともに仙台歩兵第4連隊で後方勤務し、復員後は小坂村村会議員、内谷区長、村助役、伊達郡会議員、公立福島病院議員を歴任、大正12（1923）年9月に県会議員となる。また、名誉職参事補充員に選任される。地元の養蚕業の振興に生涯をささげた。

⑦ 伊藤柳太郎（1877～1949年）石工職人

旧藤田村石工職人中野政造の次男として生まれる。幼い頃から石工職人の父の手伝いをして石工技術を身につける。成人すると大工の家柄である伊藤家に養子として入り、大工技術を習



写真 2-19 松尾芭蕉と曾良
※米倉兌作「奥の細道 伊達の大木戸」より
※伊達市梁川美術館所蔵



写真 2-20 奥山忠左衛門肖像画



写真 2-21 菅野喜三郎



写真 2-22 伊藤柳太郎肖像画

得する。その後、栃木県宇都宮市大谷の石工から最新の技術を学んだ。

大正6（1917）年には、旧森江野村の自宅敷地に本町内で国見石を使用した第1号となる石蔵を建築し、石蔵建築の先駆となる。今なお町内には国見石使用の蔵が多数ある。

4 地域区分

（1）明治時代以降の合併の経過

本町における基礎的な地域区分は「大字」であり、江戸時代の村落を踏襲している場合が多い。村落を基底とする大字は、歴史文化資源の基本的情報であり、保存・活用においても重要となる。ここでは、本構想における地域区分に関わり、明治時代以降の沿革を整理する。

明治初期は、江戸時代の16か村がそのまま継承されるが、東大窪と西大窪の両村は、明治9（1876）年に村名を阿津賀志山防塁に由来する「大木戸村」「高城村」と改称し、現在の地名につながる。

その後、明治22（1889）年市制・町村制の施行に伴う旧村の合併が行われ、泉田・小坂・鳥取・内谷村は「小坂村」、藤田・山崎・石母田村は「藤田村」、森山・徳江・塚野目村は「森江野村」、大木戸・高城・貝田・光明寺村は「大木戸村」、東大枝・西大枝・川内村は「大枝村」として発足した。

大正4（1915）年、藤田村は町制を施行して「藤田町」となった。昭和29（1954）年の町村合併促進法によって藤田・小坂・森江野・大木戸・大枝の町村は、合併して「国見町」となるが、旧大枝村大字東大枝の梁川町（現：伊達市）編入が住民投票で決定し、7月6日に編入に伴う境界の一部を変更し現在に至る。

なお国見とは、古来より国見山・国見峠などと称され、現在の阿津賀志山の周辺を指し、旧藤田町、旧森江野村、旧大木戸村にまたがり地名が存在した。『吾妻鏡』にも「伊達郡阿津賀志山辺国見駅」という記述がある。また、国見とは「栄えゆく国を眺める」という意味から、昭和29（1954）年の町村合併の際、現在の町名に採用された。

（2）本構想で用いる地域区分

本町の地域区分は上記の合併経過にしたがうもので、まずは昭和29（1954）年に行われた合併以前の町村を母体とする5地区に大別される。すなわち、旧藤田町域を「藤田地区」、旧小坂村域を「小坂地区」、旧森江野村域を「森江野地区」、旧大木戸村域を「大木戸地区」、旧大枝村域から東大枝を除いた西大枝・川内の範囲を「西大枝地区」と呼ぶ。更に細別する必要がある場合には、明治22（1889）年に行われた合併以前の旧16か村の範囲・呼称を用いる。

江戸時代	明治9年 (1876) 大木戸・高城 村名変更	明治22年 (1889) 4月1日 合併	大正4年 (1914) 1月6日 藤田町制施行	昭和29年 (1954) 3月31日合併 7月6日境界の一部変更	現在							
藤田村		藤田村	藤田町	国見町	国見町							
山崎村												
石母田村												
小坂村		小坂村	国見町			国見町						
内谷村												
鳥取村												
泉田村												
森山村		森江野村					国見町	国見町				
徳江村												
塚野目村												
東大窪村	大木戸村	大木戸村							国見町	国見町		
西大窪村	高城村											
光明寺村												
貝田村												
西大枝村												
川内村		大枝村									国見町	国見町
東大枝村												

図 2-11 国見町にいたる町・村の沿革



※（ ）内の村名は明治9（1876）年から明治22（1889）年までの村分けを示す

図 2-12 昭和29（1954）年合併前の旧町村位置図